

## サン＝テグジュペリ論Ⅱ

山本和道

### I. はじめに

サン＝テグジュペリ (1900－1944) は、1941年12月にナチス・ドイツとの戦いに参加するよう訴えるためにアメリカ合衆国に行き1943年4月まで滞在する。彼は、このアメリカ合衆国長期滞在中、英語版『人間の土地』の出版社の依頼に応じて、『戦う操縦士』を書く。彼は、1941年6月頃から夏にかけて執筆に専念し、この年中にこの作品を書き上げている。彼は、第33－2偵察飛行部隊の隊員として、1939年12月から翌年8月の動員解除までに偵察飛行を7回行なっているが、『戦う操縦士』は、1940年5月23日のアラス上空偵察飛行の体験に「文明」への思いが加わって成立した文学作品である。この『戦う操縦士』は短期間で書かれたが、『城砦』の執筆は長期にわたっている。『城砦』は、1936年に執筆が開始され、アメリカ合衆国長期滞在中にその大部分が書かれ、原隊復帰後も執筆が続けられている。サン＝テグジュペリは、1943年6月アルジェリアのラグーアを基地としていた第33－2偵察飛行部隊に復帰してから9回目の出撃にあたる1944年7月31日の出撃で帰投しなかった。彼は、出撃の数日前に、『城砦』の原稿をトランクに入れ鍵をかけてガヴォワル大尉に預けている。そして、この作品は未完となった。この作品は、彼が生き続けていたら、大きく異なった形で出版されたであろうことも考えられるが、彼が、出撃を前にして自分が生還できないことを考えて、原稿をガヴォワル大尉に渡したのだから、自分が死んでその原稿がほぼそのまま出版されることになることを覚悟していたはずである。時が遡るが、彼は、1941年9月8日付けのピエール・シュヴリエ宛の手紙では、『城砦』について、「これは、私が死んだ後、出版されることになるだろう、私がこれを完成することは決してないであろうから」<sup>1)</sup>と書いている。それで、未完ではあるが、『城砦』を、サン＝テグジュペリの作品として読み論じることは許されるであろう。しかし、サン＝テ

グジュペリ研究は、伝記研究と『星の王子さま』研究に集中するといううらみがある。とりわけ、『城砦』は、前後関係の判然としない詩的文章が延々と続くこと、大部であること、一見前時代的であることなどのせいであろうか、敬遠されている。『城砦』は、このような理由から解釈を遠慮するのではなく、自分なりの理解に達するために、様々な角度から研究する必要があると思われる。今回は、筆者のその一回目の試みとしたい。この小論では、執筆の時期が重なっている、『戦う操縦士』(1942)、『ある人質への手紙』(1943)、『城砦』(1948)、『城砦』と同様に遺稿である『手帖』(1953)において読み取ることのできる、キリスト教、キリスト教的思想、及びこれらの作品の関係を探究することにする。

## II. 『戦う操縦士』

『戦う操縦士』では、フランス軍がドイツ軍の激しい攻撃を受けていた、フランスの都市アラスの情報を収集するための偵察飛行が物語られているのだが、偵察飛行についての記述にパイロットである「私」の回想や思索が介入している。

前半では、パイロットの「私」は、司令部がどこにあるのか分からないために情報を司令部に伝えることができないので偵察飛行に意味がなくなっていること、フランスの村や街が混乱の状態にあること、希望が見出せないことなどについて語って行く。「街道の渋滞、火事、散乱している機器、押し潰された村々、混乱……大混乱。彼らは、雲の下、不条理の中で、石の下のわらじ虫のように動き回っている」<sup>2)</sup> という、上空から見たアラスを説明する、彼のことが要約しているように、フランスは戦争によって不条理な状態に陥っているのである。カミュにおいて、「不条理」の概念は、神の否定に基づいているが、この作品では、前半では、「私」は、「私は、今のところ、恩寵が離れて行ったキリスト教徒みたいだ」<sup>3)</sup>、「私は、死んだ神(dieu)に仕えるために正装する」<sup>4)</sup> というように、神の不在、キリスト教が力を失っていることを感じている。他方、「内的空間」(étendue)が人間にとって重要なものであることが語られる。「私」は、「偶然が愛を目覚めさせる時、その愛によって人間の内ですべてが整えられる。そして、その愛がその人間に内的空間の感情をもたらすのである」<sup>5)</sup> と言う。「内的空間」は、事物や人間に対する熱い思いによって人間の内面に生じるものである。人間が心を集中させるものが、「内的空間」を人間にもたらす。広い視野で捉えれば、「数世紀の間にゆっくりと獲得された、信念と習慣と認識の遺産」である「文明」が、人間に「内的空間」を与える<sup>5)</sup>。そして、留意すべきは、これは発見するものではなく築き上げるものであるということである。このことについて次のように書かれている。「悪い文学は、我々に脱出の必要について語ってきた。もちろん、人は内的空間を求めて旅へと逃げ出す。しかし、内的空間は見つけ出されるのではない。内的空間は築かれるものである」<sup>5)</sup> このように、「内的空間」は、人間の生に必須のものである。それは、知性ではなく「精神」によるものであり、人間と事物、人間と人間を繋ぐ。

カミュの文学は、人間は「不条理」から脱することはできないと自覚すること、「不条理」を受け入れることに人間の生きる道があるとした。『戦う操縦士』の「私」の場合は、どうなのだろうか。アラスで全部隊の一斉射撃をあびた後、「私」の語りに変化が訪れることになる。

アラスで九死に一生を得た後、「私」は、行為、関係、他者への愛、共同体、絆、参加、犠牲、責任などの重要性について語って行く。そして、彼は、種子について、「私が疑うことのできない唯一の勝利は、種子の力の中に存する勝利である」<sup>6)</sup>と言う。種子に創造的な力を見ている。小麦が文明に喩えられるのである。種子によって小麦が世代から世代へと受け継がれて行くように、「文明」は、後世へと伝えられて行く。「私」は、その「文明」について、「文明は、宗教と同様に信者の無気力を嘆くなら自分自身をとがめることになる。文明には信者を奮い立たせる義務がある。文明が信仰を持たない者の憎悪を嘆く場合も同じである。文明には、信仰を持たない者たちを改宗させる義務がある。ところが、昔はその証を表わし、その使徒たちを熱狂させ、乱暴な者たちを打ちのめし、奴隷状態の民衆を解放した私の文明は、今日では、心を奮い立たせることも改宗させることも、もうできなくなった」<sup>7)</sup>と語る。この「文明」の力を回復させることが問題なのである。また、戦争状態のもと、「内的空間」が見えなくなっていたということでもある。人間は、「内的空間」を築くためにも、戦争によって危機状態に陥っている「文明」を再建することが必要になってくる。「文明」の力を回復させるには、小麦にとっての種子にあたる、「共同体」を支える一つの要石が必要になる。

このように、アラスでの一斉射撃について語った後の記述では、否定的な状況を語りながらも、そこからの脱出の道が模索されている。そして、アラスでの攻撃によって「文明」を再建するための方法を学んだことが語られることになる。

語り手「私」は、アラスでの変化について次のように述べている。「私は、アラスの対空砲火のお蔭だと思う。あの対空砲火が、殻を砕いてくれたのだ。今日一日ずっと、私は、たぶん自分の中に住まいを準備していたのだろう。今まで、ぼくは、怒りっぽい管理人にすぎなかった。個人はそのようなものだ。しかし、「人間」が現われた。全く簡単に、私の代わりに、私の中に「人間」が住みついた。「人間」は、ばらばらになっている群集を見詰めた。そして、「人間」の目に入ったのは、一つの国民だ。彼の国の国民だ。「人間」が、この国民とぼくの共通の尺度なのだ」<sup>8)</sup>と言う。「人間」は、「戦友の共通の尺度」であるが、「諸国民と諸民族の共通の尺度」でもある。「人間」は、フランス国民にだけ宿るというわけではない。普遍的なものである。上述の「種子」及び「共同体」を支える一つの要石」といったことばは、「人間」の喩えとして使用されていたのである。

この後、個人ではなく「人間」が重要であるという主張が、繰り返し提示されることになる。例えば、個人を石材「人間」を大聖堂に喩えて、次のように語られている。「私の文明は、個人を貫く「人間」への崇拜に基づいている。私の文明は、石材を通して大聖堂を識別することを教えてきたように、数世紀の間、「人間」を表わそうとしてきた。[……] 私は、石材を合計した

ものと大聖堂を混同してしまった。それで、徐々に、遺産が消え去ってしまうことになった<sup>9)</sup>。このように「人間」を個人の内に導入する必要性を悟ることに、困難な長途の旅の後に辿り着いたということになっている。

それでは、「人間」とは何なのか。これは、キリスト教抜きに把握することはできない。「私」は、「数世紀の間、私の文明は、人間を通して神 (Dieu) を凝視してきた。人間は神に似せて創造された。人間の中の神が敬われていた。人間たちは神において兄弟だった。この神の反映 (Ce reflet de Dieu) がそれぞれの人間に侵すことのできない威厳を授けていた。神と人間の関係は、各人の自分に対する義務、或いは各人の他人に対する義務を明確に根拠づけていた。

私の文明は、キリスト教の諸価値の継承者である<sup>10)</sup> と言う。「人間」とは、この引用文の中の「神の反映」のことと見なすことができる。そして、この作品において、「私の文明」は、「キリスト教の諸価値の継承者」なのであるから、まさに「キリスト教の時代」の「文明」であると言うことはできないということである。しかし、「人間」を失わない状態であれば、「キリスト教の時代」ではなくても、キリスト教の諸価値という、「キリスト教の時代」と同質のものを持つことになる。

「人間の中の神」を敬うことは、人間の中の「人間」を敬うことと同じことである。「人間」は、神より発したものであった。神性が、「人間」である。それでは、キリスト教の諸価値とは、どのようなものなのであろうか。まず、「平等」について、「私」は、「神 (Dieu) を受け継ぐ私の文明は、「人間」において人間たちを平等にしてきた<sup>11)</sup> と言う。キリスト教が有効であった時代において、人間が神において「平等」であったように、「私の文明」では、人間は「人間」において「平等」だというのである。同じ調子で、「人間に対する敬意」、「友愛 (人間が兄弟であること)」、「愛徳」、「自分に対する敬意 (自分を通しての「人間」に対する敬意)」、「責任」について語られる。これらの価値は、あくまでもキリスト教の価値である。例えば、「平等」は、各役割が等価値ということであり、「同一性」ではない。また、これらの価値が有効である状態では、自由は、個人の放縦ではない。「私」は、「自由とは、種子の力が及ぶ領域で木が成長する自由のことである。「人間」への上昇の風土なのだ<sup>12)</sup> と言う。

この後、「私」は、「ヒューマニズム」は、個人に対する「人間」の優位を啓蒙し、不滅にすることを自分の唯一の使命にしてきた。「ヒューマニズム」は「人間」を説いてきた<sup>12)</sup> と述べている。上述した、「キリスト教の諸価値の継承者」である「私の文明」は、「ヒューマニズム」の時代の「文明」を意味しているのである。以上見たように、キリスト教の諸価値は、「キリスト教の時代」には、神によって存在したのに対して、その後の「ヒューマニズム」の時代には、「人間」のお蔭で獲得することができるというわけである。サン＝テグジュペリの「ヒューマニズム」は、キリスト教の神には依拠しないが、「神性」、キリスト教の諸価値は求めるのである。

ところが、「私」は、「人間」を忘れて、私たちは少しずつ、個人の問題に私たちの倫理を限って行ったのである<sup>13)</sup>と言う。「人間」を見失ったので、「平等」、「人間に対する敬意」、「友愛」、「愛徳」、「自分に対する敬意」、「責任」といったキリスト教の諸価値を失ったというのである。そうなった理由は、次の文章が説明している。「私たちの「ヒューマニズム」は行為を怠るようになった。それで、その試みにおいて失敗してしまった。

その本質的な行為に今一つの名が与えられた。その行為とは、犠牲なのである<sup>14)</sup>人間の中に「人間」を受け入れるには、「犠牲」が必要であるし、「人間」を受け入れていけば、「犠牲」を抵抗なく行なうことができるということにもなる。「キリスト教の時代」には、神、「犠牲」を失うということはなかったが、「ヒューマニズム」の時代には、意識的に「犠牲」を行なわなければ、「人間」を失うことになるのである。

ただ、これは、「集団」によって強制される犠牲ではない。「人間」が存在する「共同体」の「犠牲」は、「人間」が不在の「集団」の犠牲とは異なるのである。「私」は、「私たちは、「人間」を無視する「集団」の倫理が少しずつ迎え入れられるのを見た。その倫理は、どうして個人は共同体のために自己を犠牲にする義務があるのかを明瞭に説明するだろう。だが、ことばの手管を使わなければ、なぜ共同体はたった一人の人間のために自己を犠牲にしなければならないのかということを説明することはもうできないだろう<sup>15)</sup>と言っている。人間が「人間」と一体化する時、人間はひとつの全体となる。その時、人間は、全体と結びついているので、全体から分離することはできないというのであろう。「精神」によらないこの「集団」は、「人間」が不在の、個人が寄り集まっただけの「蟻塚」なのである。

「犠牲」、「人間」を失った状態は、「ヒューマニズム」の時代という長い時間的広がりにおいて見受けられる状況のことであるが、「私」が『戦う操縦士』の前半で説明しているフランス、人生の一時期の「私」にも当て嵌まることであった。「私」は、「人間」を喪失していたけれども、アラスの砲火の中で、偵察飛行が持つ「犠牲」の行為という面が引き出されて、自分のうちに「人間」が住みつくという経験をしたのだった。「私」は、出撃する時は、「与えるまえに受け取りたいと思った」が、アラスでの一斉射撃で「受け取る前に与えなければならない」ことを学んだ。「彼」は、「穹窿の要石として「人間」を選んだ文明に属する者」に相応しい状態に戻ったのである<sup>16)</sup>。ところが、この「正しい認識」にもかかわらず、現実の状況は何ら変わっていないことが、最後の章で示されることになる。

以上検討したように、『戦う操縦士』では、「人間」を受け入れることが主張されている。それを可能にするのは、ことばではなく「犠牲」という行為である。「犠牲」によって「人間」が存するかぎり、「平等」、「人間に対する敬意」、「友愛」、「愛徳」、「自分に対する敬意」、「責任」といった価値は有効である。キリスト教の神に帰依しなくても、キリスト教の諸価値を獲得することができるのである。『戦う操縦士』で求められているのは、キリスト教、キリスト教の神ではなく、過去のキリスト教と同じ効力を持つ「ヒューマニズム」、「人間」である。「人間」と

は、キリスト教の教義が目指している存在ではあるが、キリスト教の教義は求められてはいない。『戦う操縦士』の「私の文明」は、「キリスト教の諸価値の継承者」ではあっても、キリスト教教義の継承者ではないのである。

### Ⅲ. 『手帖』

ここで疑問が生じる。それは、どうしてキリスト教の諸価値をキリスト教そのものから受け入れずに「ヒューマニズム」の「人間」に求めるのであろうかという疑問である。『戦う操縦士』では、キリスト教と「ヒューマニズム」の相違、神と「人間」の違い、キリスト教におけるどのようなものが受け入れられないのかといった問題は探究されていない。

だが、『城砦』と同じく1936年から1944年にかけて書かれた『手帖』には、『戦う操縦士』では認められない、キリスト教に関する記述が存在する。

『手帖』には、「宗教の二律背反。今日、私が歴史批評をこれほど高く評価しているのに、私は諦めて決してそれを行使しないようにしなければならない。今日、私が口頭伝承を拒否しているのに、私はそれに同意しなければならない。今日、キリスト教がある種の特性を守る保守的な要素であるのに、私はキリスト教を福音書と一致させなければならない。今日、世界を分析することが私に驚異を信じる気持ちを失わせてしまっているのに、分析することができなかった時代の驚異を信じなければならない」<sup>17)</sup>と書かれている。信仰を持つには、自分が価値があると思っっている、歴史批評、科学的な態度を放棄しなければならない状況にあるということである。そして、サン＝テグジュペリは、自分の聖書の読み方を受け入れない聖職者の姿勢について、「あなたは、傲慢な心という高いところから、私たちの威厳を確立するものを、傲慢だ、「放蕩」に対する欲望だと決めつける」<sup>18)</sup>と、セルティヤンジュ神父に不満をぶつけている。そして、「科学的なやり方においては、私たちは、自分にとって大事な学説を救うために事実と歴史を前提とした緻密な批判のもとにその学説を置くことを拒否する者は誰でも、卑怯者と見なすものであることをあなたは知らないのか」<sup>18)</sup>と書いて、論証をせずに聖書の記述を受け入れ信じる姿勢を批判している。それでは、具体的には聖書のどのようなところを受け入れることができないのであろうか。それは、次の文章に読み取ることができる。「それに、あなたは、神についての文献を少なくとも人間の弱さで傷つけている幾つかの矛盾（聖母のエリザベツ訪問、復活など）に、あなたはどのように対処するのか。それに、後にキリストを予言者たちが予言していた人物とぴったり合わせるために用意された不誠実な引証に、あなたはどのように対処するのか」<sup>19)</sup>この文章は、彼が福音書の超自然なことの記述や、旧約聖書の予言をイエス・キリストに当て嵌めるための操作に納得が行かなかったことを語っている。

また、サン＝テグジュペリは、「しかし、キリスト教は、古代ローマの世界では、何ものをも妨げることがなかった。今日では、私が執着する権利がある、思想上の幾つかの事項と対立す

るようになってい」<sup>20)</sup> という言い方をしている。現代は古代ローマの時代と異なっており、聖書の記述によって現代を完全に説明することはできないということであろう。彼にとって、キリスト教は首尾一貫性のある世界観を呈示するものではなくなっていたのである。『手帖』は、彼がキリスト教をもう絶対的真理とは考えられなくなっていたことを明らかにしている。

しかし、『戦う操縦士』において、「私の文明は、神 (Dieu) を拠り所としていた時は、人間の心に神 (Dieu) を築く、この犠牲の観念を救い出していた」<sup>21)</sup> と、キリスト教の神によらずに「犠牲」を実行することの困難が語られているが、『手帖』においても、次のような文章が存在する。「わたしは、神 (Dieu) とは別のものから権威を生じさせる困難を前にして恐怖感に襲われている」<sup>22)</sup> 自分が生きる道をキリスト教とは無縁のところに見出すことの困難という、重複するところも存在するが、『手帖』における、科学的な態度や批判精神から聖書があるがままに受け入れることができないという主張や、論証を欠いているという批判を認めない聖職者に対するいらだちは、『戦う操縦士』においてキリスト教について書かれなかったところを補完するような側面がある。では、『戦う操縦士』と『城砦』、『手帖』と『城砦』は、どのような関係にあるのだろうか。

#### IV. 『城砦』

『城砦』は、王、王の父で暗殺された前王、論理学者、歴史家、批評家、幾何学者、詩人、彫刻家、建築家、歩哨、舞姫、娼婦、王の敵など作中人物は登場するが、物語の展開という横軸、出来事の連鎖で何かを表現しようとするということが極力否定され、『人間の土地』や『戦う操縦士』に存在していた、時間の経過及び因果関係を見捨てた表現方法が突き詰められている。『城砦』は、重複や類似の多い詩的言説との格闘によって読者がその内面に「内的空間」を築くことを強いるような作品である。

王は、「おお、城砦よ、私の住まいよ、私はおまえを砂の企てから救うことにする」<sup>23)</sup> と言う。彼は、砂漠から帝国の民を守るために、砂漠に侵害されることのない城砦を築く。また、彼は、城砦を船に喩えて、「人間を載せた船よ、おまえが存在しなかったら、人間は永遠を手にはすることはないだろう！」<sup>24)</sup> と書く。この堅固な城砦の内部で、「帝国」の成員は、永遠と繋がる自分のあり方を探究することになる。

『戦う操縦士』では、「人間」が求められているが、『城砦』では、神への語りかけが存在する。王は、自分の神を「主」(Seigneur) と呼び頻りに語りかけを行なう。この語りかけは、この作品を構成する主要な力となっているだけでなく、「帝国」の民のあり方を形成して行く。それにしても、この神は、如何なる存在なのであろうか。

それは、サン＝テグジュペリが少年時代信じるよう教育されたカトリックの神なのであろうか。確かに、そう思わせる箇所が随所に存在する。以下その幾つかを引用することにする。

「[……] 彼らは、心にそんなにも衝撃的な精髓によって世界を満たされたが故に神 (Dieu) を崇拝するのだ」<sup>25)</sup>、「彼が死んだ時、涙を流した私を、神 (Dieu) がお赦しになりますように」<sup>26)</sup>、「彼らが、皆赦され、皆迎え入れられて、神の懐の中にさらに留まりますように」<sup>27)</sup>、「主よ、私は、あなたの恩寵によって力を得て、生成を可能にする坂を、あなたへと登って行くのです」<sup>28)</sup> これらの文章の神は、カトリックの神を意味しているように思える。けれども、この作品でも、作中人物がその生をイエス・キリストに依拠させるということはない。それどころか、「[……] もし神 (Dieu) が私に姿を示すために私と似た存在になるなら、それは決して神ではない [……]」<sup>29)</sup> という文章に、「受肉」の概念の否定を読み取ることができる。

ただ、『城砦』は、王は、「とりなし人」の役割を担おうとする。彼は、「[……] まず他の人たちに神 (Dieu) をもたすために、私は、ひどく足を引きずりながら街道を歩いて行くのだ」<sup>30)</sup> とか、「私は、どの人に対しても私に対する愛を請い求めることはありません。彼らがあなた (Toi) への道として私を敬うなら、彼らが私を知らなくても、或いは私を憎んでいてもかまわないのです。それは、彼らが属しているあなただけを彼らが愛するよう願っているからです [……]」<sup>31)</sup> という。むろん、彼が、イエス・キリストと同じ役割を果たすということはない。奇跡をなすということはないし、復活、罪の贖いの観念も問題にならない。それどころか、彼は、神は、祈りに応えるということはないと言う。この作品では、そのような言説に何度も出会うことになる。以下その幾つかを引用することにする。「神 (Dieu) の返事を期待する無分別な者よ。神がおまえを受け入れ、おまえの病いを直されるのは、熱を取るように、その御手でおまえの問いを消してしまわれることによってなのだ」<sup>32)</sup>、「[……] 応答のない祈りの実践によってしか、神 (Dieu) を知るための修行はできないのである」<sup>33)</sup>、「おまえは、決してしるしを受けることはないだろう。おまえは、神 (divinité) のしるしを望んでいるが、神が存在する証拠は、まさに沈黙なのだから」<sup>34)</sup>。このように、『城砦』では、神が祈りに答えないことこそ神が存在する証なのである。神は祈りに答えないことに意味があるとされる。裁きの神が否定されているが、神に愛を求めるといってもない。神は、祈りに対して、愛で応えることはなく、それで良いというのである。それで、それは、神の不在に結びつかない。ジッドの『アンドレ・ワルテルの手記』(1890) や『贖金つかい』(1926) においては、作中人物の意識で神の沈黙が神の不在、神の否定へと移行するのを読み取ることができるが、この作品では、そういうことはない、逆であるという言い方になっている。

それにしても、神が存在するのなら、どうして祈りに答えないのであろうか。その疑問に対しては、王は、次のように答える。「そして、初めて、私は、祈りの偉大さは、まず決して応答がないということに存するというところを、その交換に取り引きの醜さが入り込むことがないということにあるということを見抜いていた」<sup>35)</sup> 祈りは、祈る者の私利私欲、強欲を満足させるものであってはいけないということである。

キリスト教には、神への信仰が第一義であり、現世利益を求めない側面が存在するが、それ



がここにおいて徹底されている。『夜間飛行』（1931）におけるように、日常的幸福、物質的幸福は追求されるべきものではないのである。そして、このことは、『城砦』では、神が、生成の目標となるということと繋がっている。神は人間が目標にして目指すものであるという記述は、『城砦』の至るところで出会うことになる。以下その幾つかを引用する。「おお、おまえたちは、神（Dieu）への素晴らしい上昇のための腐植土であり、糧であり、乗物なのだ」<sup>36)</sup>、「[……] 神（Dieu）は、提示されるが決して到達されることはないのだ [……]」<sup>37)</sup>、「そして、次から次に訂正を行ないながら、私は、神（Dieu）へと歩いて行く」<sup>38)</sup> これらの文章の神は、成長することを目指す人間にとって目標となる存在である。しかし、その神は、イエス・キリストでも全知全能の神でもなく、理性でなく「精神」で物を見る人間に微かに感じられる、光り輝くものなのであろう。いわば、人間の「精神」が抱く一つの理想のようなものであると思われる。これは、人間が生命を向上させて行くための牽引力である。人間はそれを目標として進んで行かなければならない。しかし、この神は、神を求める心を持たない者には、牽引力とはならない。探し求められることによって存在する神である。王は、「祈りは、神（Dieu）がお答にならない限り、実り豊かである」<sup>39)</sup> と言う。神が祈りに答えるなら、このような営みの有効性が薄れるので、神は沈黙すべきなのである。

『ある人質への手紙』（1943）には、家や友人は、現前に存在しないほうが、その存在の力を発揮すると書かれているが、『城砦』においても、神が遠く手の届かないところに存在すると思うことが、生きるための力となっている。

『ある人質への手紙』では、さらに、人間の心を引きつけその心の中に「内的空間」を生じさせ、人間に生きる力を与える「極」の例として、「私」が友（レオン・ウェルト）とともに二人の水夫を招待して、ソーヌ川沿いのレストランで催した宴に関わった人々を一致に導いた微笑み、スペイン内戦取材の折に、アナキストの民兵たちに逮捕された「私」を覆っていた悲劇的な状況を消し去り明るい光を導入した、「私」が民兵の一人と交わした微笑み、サハラ砂漠で遭難した者と救援隊の間で交わされた微笑みという、三つの微笑みの体験が紹介されている。そこでは、人間は、「どの教会かは言えないけれども、同じ教会の信者」のような存在となり、「差異」を越えて和合が成立していた。そして、「私」は、友（レオン・ウェルト）に関して、「一つの文明は、まず第一に、実質の中に築き上げられる。実質とは、人間の中にある、ある熱に対する盲人の欲求のことだ。それから、人間は、失敗を繰り返すことによって、火に通じる道を見出すのである。[……] 私は、理性の争いを越えて、私の中に存する、その火への巡礼を敬ってくれる道連れを渴望している」<sup>40)</sup> と言う。この「火」も、「極」であり、上述の『城砦』の神と同質のものである。『城砦』の神は、サン＝テグジュペリの文学を代表する「極」の一つなのである。

『城砦』においては、愛で報いることのないこの「極」に向かって自力で歩いて行くことが探求されているが、この歩みには「憩い」はありえない。「[……] 主よ、あなたが私に決して

お答えにならないので、あなたを称賛しながら、歩いて行きます、もし私が探しているのを見つけたら、主よ、私は、生成することを終えてしまったことになるからです」<sup>41)</sup> という、王のことばに読み取ることができるように、人間の生成の意味は、目的に到達することではなく目的に向かって歩を進めることにある。神に向かって歩いて行くことそのものが、人間の目的である。神は完全であるが人間は不完全な存在なので、生きることは、完成することではなく、完成に向けた上昇の歩み続けることであるということになる。『城砦』には、死による神との一体化を匂わせる表現が所々存在するが<sup>42)</sup>、神との一体化は、生きている間はあり得ないのである。

他方、『城砦』においては、遠いところだけでなく、身近にも神が存在する。

王は、「主よ、あなたは両方の共通の尺度なので。あなたは色々な行為の本質的な結び目なのです」<sup>43)</sup> という。ここにおいては、神は、目に見えない「結び目」であり、不調和な外見を越えて諸々の事物を相互に関係づけるものである。この神は一見汎神論の神のように思えるが、上記の引用文は仕事と取り組む「庭師」の姿勢についてのものであり、この神は、人間が事物に向かうことによって、築き上げるべきものなのである。

これは、「帝国」の諸々の物に関係づけるものであるが、このことを別の角度から見ると、神によって人間が結ばれるということ、人間の中に神を見ることにもなる。それで、王は、次のような言い方もするのである。「[……] 神 (Dieu) を通してあらゆる人々を愛する者は、たった一人の人間しか愛さず、自分の愛の共犯者にただ単に自分の人格の哀れな領域を広げる者よりも、人間の一人一人をはるかに深く愛しているのである。[……] おまえがほしいと思っている贈り物をもらうということでは、おまえに全く役立たない人でさえ、その人に贈り物をするなら、そのことでおまえに役に立つことができるのだ。おまえは、その人を通して神 (Dieu) に仕えているのだから」<sup>44)</sup>、「[……] 人間は、自分の中に懐胎し自分と他の者たちを統治している神々 (dieux) を通してだけ他と意思を通い合わせるのである [……]」<sup>45)</sup>、「愛や友情は、おなた (Toi) の中でのみ真に結ばれるからです」<sup>46)</sup>

他方、『城砦』では、次のような表現にも出会うことになる。「今、私は、愛することは認識することであるということ、事物を通して読み取られる面ざしを知ることであるということを知っている。愛とは神々 (dieux) を認識することに他ならないのである」<sup>47)</sup>、「精神は、事物ではなく、人が事物を通して読み取ることができる、事物を結び合わせる唯一の面ざしを喜ぶのである」<sup>48)</sup> これらの文章の「面ざし」(visage) は、「事物を通して読み取られ」、「事物を結び合わせる」ものであるのだから、目に見えない「結び目」である。「事物に意味を与える構造」である。『城砦』では、「面ざし」は、神、神々と同じ意味で使われているのである。

また、『城砦』にも、「内的空間」についての言及が多く存在するが、それは、聖なる「結び目」、「面ざし」の反映を人間の内面に築き上げる重要性を主張するためであると見なすことができる。

さらに、聖なる「結び目」、「面ざし」という、この神は、『戦う操縦士』において個人の内に住まわせるよう求められている「人間」に相当するということにも注目すべきであろう。『城砦』の神は、『戦う操縦士』の「人間」と同様に、人間の「共通の尺度」なのである。それで、『城砦』においても、『戦う操縦士』と同じように、「犠牲」が重要なものとなっている。絶望による自殺から愛による犠牲を区別すべきであり、犠牲が行なわれるには領域、共同体、神殿といった一つの神 (dieu) が必要であるという主張<sup>49)</sup>、死を受け入れるための理由となるものは自分がそれによって生きることができるものであるといった記述<sup>50)</sup>、『城砦』を特徴づける祭式に関連して犠牲と祝祭は一体であるという指摘<sup>51)</sup> など、多くの箇所では「犠牲」が強調されている。

『城砦』の「帝国」は、階級的秩序のある社会である。王は、「というのは、何物も対立していないからである。神 (Dieu) への愛は、おまえたちの中で帝国への愛を増大させる」<sup>52)</sup> と言う。「帝国」の構成員を繋ぎその秩序を保つ力となるのが、神への意識であるということである。「帝国」に存在するものは、聖なる「結び目」で関係づけられている。上述の「犠牲」の精神が効力をもっており、「帝国」の各民は各持ち場で自分の役割を果たす。「帝国」は、「同一性」とは異なる「平等」を重んじる社会なのである。

既に見たように、『戦う操縦士』では、「私」は、アラスの一斉射撃で一種の悟りの境地に到達した。しかし、それは、「私」の内面の変化にすぎず、「私」の外の世界には全く変化をもたらすことができなかつた。『城砦』では、『戦う操縦士』の「私」の内面が到達した認識を、一つの社会に具体化する試みがなされているのである。それは、『戦う操縦士』の前半及び最後の章で示されている惨めな状態から脱却した、堅固な「文明」を築き上げることであった。要するに、『城砦』の「帝国」は、『戦う操縦士』の「私」が人間にとって肝要であると主張している、「人間」の受容、「犠牲」、キリスト教の諸価値を実現させつつある社会である。

ところで、『城砦』では、このような世界の建立を説明するために、神 (dieu)、神々 (dieux)、神 (Dieu) といった言葉が繰り返し使用されている。読者を戸惑わせがちな、このような言葉の使い分けをどのように解釈すればよいのだろうか。確かに、これらの言葉の使い方は、必ずしも厳密ではない。ただ、以上検討したように、神 (dieu)、神々 (dieux) は、多神教の神、汎神論の神というよりも、上述の「面ざし」、聖なる「結び目」を意味する傾向が強いと言うことはできるであろう。神 (Dieu) も、本来の使用法からずれて、生成の目標となる存在を意味している。或いは、広い視野で捉えた聖なる「結び目」のことである。

## V. おわりに

『戦う操縦士』では、イエス・キリストについての言及は存在しないが、その属性である「犠牲」が力説されている。「私」は、「おのおのの人間だけが、すべての人間に責任がある。初めて私は、自分のものとしたかと思っ

ができる。それは、「人類の罪を担う」ということである。おのおのの人間がすべての人間のすべての罪を担っているのである<sup>53)</sup>と言う。キリスト教は人間の「罪」に焦点を当て、その罪からの救済をイエス・キリストに求めるが、『戦う操縦士』では、人類の罪を贖うために十字架にかかったイエス・キリストに帰依するのではなく、各人が自分で罪の問題を処理しなければならないし、他者の罪にも責任を持つべきであるということになっている。これは、人間が「イエス・キリスト」の役割を自分で担うことを意味する。キリスト教の教義の基礎を確立したパウロは、『ローマ人への手紙』において、律法を守るという行為よりも神への信仰が重要であると語っているが、『戦う操縦士』では、信仰ではなく行為「犠牲」が求められている。そこに、キリスト教の神への信仰ではなく、キリスト教の変形を読み取ることができる。「私の文明」を「キリスト教の諸価値の継承者」と定義しても、キリスト教の教義の継承者とはしないのである。

また、聖なる「結び目」であり生成の目標である『城砦』の神も、カトリックの父なる神でもイエス・キリストでもない。これは、いわば、サン＝テグジュペリが自分に合うようにキリスト教の神を作り直したものである。

逆の見方をすれば、キリスト教の教義もイエス・キリストも信じないが、キリスト教なしには、『戦う操縦士』の「人間」も『城砦』の神もありえないということがある。彼の文学には、キリスト教の教義そのものは認められないが、キリスト教の反映が存在している。キリスト教の神には帰依しないが、キリスト教の神の「神性」は求めるということである。それは、太陽という天体は否定視するが、太陽が発する光は自分のものにしようというようなものであった。

『戦う操縦士』と『城砦』のこのような重なり合いや、『戦う操縦士』の主張が『城砦』において実現しているという点がある反面、『城砦』には、『戦う操縦士』に存在しないもの、或いは僅かしかないものも見受けられる。それは、王が「とりなし人」としての役割を果たそうとしているところや垂直の方向性である。確かに、『城砦』には、キリスト教の神の超越性を匂わせる表現に満ちているということがある。既に見たように、『城砦』には、まさにカトリックの信仰を持った人が発するような言葉が存在する。そこにカトリックの神への信仰と読むよりも、あたかもカトリックの信者が自分の信仰について語るような口ぶりで聖なる「結び目」や生成のための目標となる存在のことが言及されていると見なすほうが妥当であるということはある。しかし、それでも、『城砦』の世界は、『戦う操縦士』のそれよりも、カトリックの神への信仰から近いところに位置しているという印象は否めない。特に、死後における、神との一体化をほのめかす表現にそれが感じられる。だが、信仰への志向にブレーキをかける力も働いている。『城砦』の世界は、『手帖』の主張を否定するところまでは行っていないということである。その超越性への志向にもかかわらず、科学的精神、批判精神が放棄されるには至っていない。

サン＝テグジュペリには、中世、貴族社会への回帰の志向と飛行機を代表とする現代科学の産物への愛、宗教的精神と科学的態度といった矛盾するものが共存しているが、『城砦』は、『戦

う操縦士』よりも前者の要素が濃厚である。『城砦』は、描かれている領域は複雑で広大なのであるが、このような矛盾という点では一方への傾斜、偏りがあるという二面性を持っている。

[注]

- 1) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes II*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 951.
- 2) Ibid., pp. 161-162.
- 3) Ibid., p. 120.
- 4) Ibid., p. 124.
- 5) Ibid., p. 160.
- 6) Ibid., p. 209.
- 7) Ibid., p. 213-214.
- 8) Ibid., p. 215.
- 9) Ibid., p. 216.
- 10) Ibid., p. 217.
- 11) Ibid., p. 218.
- 12) Ibid., p. 220.
- 13) Ibid., p. 222.
- 14) Ibid., p. 221.
- 15) Ibid., p. 223.
- 16) Ibid., pp. 225-226.
- 17) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes I*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 477.
- 18) Ibid., p. 531.
- 19) Ibid., p. 532.
- 20) Ibid., p. 478.
- 21) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes II*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 221.
- 22) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes I*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 477.
- 23) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes II*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 375.
- 24) Ibid., p. 381.
- 25) Ibid., p. 459.
- 26) Ibid., p. 461.
- 27) Ibid., p. 482.
- 28) Ibid., p. 819.
- 29) Ibid., p. 659.
- 30) Ibid., p. 500.
- 31) Ibid., pp. 832-833.
- 32) Ibid., p. 475.
- 33) Ibid., p. 493.
- 34) Ibid., p. 559.
- 35) Ibid., p. 537.

- 36) Ibid., p. 483.
- 37) Ibid., p. 491.
- 38) Ibid., p. 641.
- 39) Ibid., p. 493.
- 40) Ibid., p. 102.
- 41) Ibid., p. 820.
- 42) Ibid., pp. 496-497.
- 43) Ibid., p. 834.
- 44) Ibid., p. 495.
- 45) Ibid., p. 657.
- 46) Ibid., p. 832.
- 47) Ibid., p. 619.
- 48) Ibid., p. 629.
- 49) Ibid., p. 636.
- 50) Ibid., p. 515.
- 51) Ibid., p. 605.
- 52) Ibid., p. 640.
- 53) Ibid., pp. 212-213.

#### [参考文献]

- ・ Jean Huguet, *Saint-Exupéry ou l'enseignement du désert*, La Colombe, France, 1956.
- ・ André-A. Devaux, *Saint-Exupéry*, Desclée De Brouwer, France, 1965.
- ・ *Cahiers Saint-Exupéry 3*, Gallimard, France, 1989.
- ・ Paul Webster, *Saint-Exupéry Vie et Mort du Petit Prince*, Éditions du Félin, France, 1993.
- ・ Jules Roy, *Saint-Exupéry*, La Renaissance du Livre, France, 1998.
- ・ Emmanuel Chadaeu, *Saint-Exupéry*, Perrin, France, 2000.
- ・ リュック・エスタン、『サン＝テグジュペリの世界』、岩波書店、1990
- ・ 稲垣直樹、『サン＝テグジュペリ 人と思想』、清水書院、1993
- ・ 山崎庸一郎、『『星の王子さま』のひと』、新潮社、2000
- ・ 山崎庸一郎古稀記念論文集刊行委員会、『友情の微笑み』、みすず書房、2000
- ・ 『ユリイカ 7月号 特集サン＝テグジュペリ』、青土社、2000